

仏教のいましめ、すなわち「戒」は、^{かい}外から強制される「決まりごと」ではありません。仏の道を歩む上での「約束」なのです。「約束」は、それを誓い、守る覚悟をもつものです。「戒」という「約束」は、私たちがよく生きるための支えになってくれます。

その戒の中に、^{じゅうじゅうきんかい}十重禁戒という、十の大切な戒があります、その冒頭に置かれているのが、^{ふせつしょうかい}「不殺生戒」です。「殺さない」ということです。

他の人間はもちろんのこと、あらゆる生命をあやめることをしないと誓い、「約束」を守る覚悟を決めるのです。

他の命を害さないというのは、仏の道を歩む上で、最も基本的で重要なことです。だからこそ、「不殺生戒」が、十重禁戒の一番はじめに もうけられているのです。

しかし、「戒」を守ろうと誓った仏教徒が、この「戒」にそむいてしまうかもしれない行為があります。

「食べる」ということです。

私たちは、何かを食べなければ、自分の命を保つことはできません。食べるということは、他の命を奪うことです。^{さいしょく}菜食であっても、植物の命を自分に取り入れることに変わりはありません。私たちは、他の命をあやめなければ、生きてはいけません。

どうすればいいのでしょうか。

「食べる」ということが、自分の命を保つために必要不可欠な行為である以上、奪った命を^い活かすことを考えなければなりません。

その活かし方は、「よく生きる」ということです。自分の命を、正しく用いることが、食事によって奪った他の命を活かすことなのです。その時、はじめて、食べるのが、他の命を「奪う」のではなく、他の命を「頂く」ことになるのでしょうか。

そして「よく生きる」上で、大きな支えとなるのが、^{ふせつしょうかい}「不殺生戒」をはじめとした「戒」、すなわち仏の道を歩む上での「約束」なのです。仏教徒は、この「約束」をとっても大切にします。